

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

Criminal Cases in the Arctic Regions of Canada (Cultural Lectures : Cultural Anthropology for the Settlement of Disputes (5))

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2016-03-08 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 岸上, 伸啓 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/00005862

カナダ極北地域の事件簿

岸上 伸啓

(国立民族学博物館助教授)

はじめに

イヌイットはカナダの極北地域に住んでいる。そこは木がほとんど育たない、荒涼とした殺風景な所である。極北地域の一年は、長く寒い冬と短く涼しい夏の二つの季節からなり、一一月ごろから翌年の五月ごろまでは海も陸も氷雪に覆われる。地上から雪がなくなるのは七月の中旬から

一〇月初めころにかけての三か月ほどである。

西はシベリアの北東端の沿岸部からアラスカ、カナダ、そして、グリーンランドにいたる極北地域に住む先住民は一括して「エスキモー」と呼ばれてきた。カナダでは「エスキモー」とはアルゴンキン語族系の言葉で「生肉をくらうやから」の意味があり、民族差別的な名称であるとして、一九七〇年代より「人々」を意味する「イヌイット」が民族名称として公式に使用されるようになった。

現在、カナダには四万人あまりのイヌイットが、主に北西準州の北西部、ヌナウト、ケベック州の極北部ヌナヴィク、ラブラドルに住んでいる。また、八千人あまりがモントリオールやオタワなど都市に住んでいる。

カナダ・イヌイットの歴史

一七世紀ころから今世紀初頭までのイヌイットの社会を我々は伝統社会と呼んでいる。冬にはイヌイットは海水上でのアザラシの呼吸穴狩を行うためにいくつかの家族集団が集まり、最大で一〇〇人程度のキャンプ集団を形成した。それ以外の季節には、二五人程度かそれより小さいキャンプ集団を形成し、ホッキョクイワナ漁やカリブー猟を行った。かつては季節的な自然の変化に即して、イヌイットは集団形態や狩猟を変化させていた。

今世紀に入るまで、イヌイットのコミュニティの規模は一〇〇名を超すことはなく、対面的な社会であった。また、他集団との接触は少なく、あっても一時的であった。イヌイット全体を統括するような政府は存在せず、異なる地域集団との遭遇は、しばしば戦いを結果した。かつてのイヌイット社会には法を施行し、違反者に制裁を加えるような機関がまったく存在しなかった。

しかし、カナダ・イヌイットの社会は、一九一〇年代からはホッキョクキツネの毛皮を中心とする毛皮交易へ巻き込まれることよって、一九六〇年代からはカナダ政府による定住化政策のために大きな社会変化を余儀なくされてきた。さらに一九三〇年代までにはキリスト教がイヌイットの間に浸透し、彼らの伝統的な宗教にとってかわった。人々は政府が半ば強制的に作り出した村に一年を通して住むようになり、そこで学校に通ったり、賃金労働に従事するようになった。狩猟やキャンプも村から出発し、村に帰ってくるという移動パターンへと変化した。定住化がもたらした大きな変化のひとつは、一年を通して二〇〇人以上が同じ場所に住むという状況を作り出したことである。彼らは賃金労働、滑石彫刻の制作、政府支出の生活補助金を利用して、漁網、ライフル、スノーモービル、船外機付きボート、ガンリン、銃弾を購入し、漁労や狩猟を続けている。イヌイットが移動生活をやめ、村での定住生活を始めて

からすでに三〇年以上がたっている。一九九九年現在、イヌイットはカナダ政府と政治的な合意協定を結び、ヌナブト、ヌナヴィクなど準自治州を創設したが、イヌイットはカナダ国民であるため、警察権はカナダ政府やケベック州政府の管轄下にある。イヌイット社会において紛争が生じた場合、その解決のために警察が介入することが多くなっている。

カナダ・ヌナヴィク地域の紛争について

ケベック州の極北部ヌナヴィクに住む総人口は九、四〇〇人あまりであり、そのうちの九割がイヌイットである。彼らは、二〇〇人あまりから一、六〇〇人あまりの人口を有する一五村に住んでいる。一九九八年の同地域で報告された主な犯罪は、下の表に示すとおりである。人口に比して犯罪発生の頻度が非常に高

ヌナヴィクにおける主な犯罪件数
(カティヴィク地域政府年報 1998年)

罪名	件数
暴行	525 (うち家庭内暴力165, 性的暴力108)
自殺	5
自殺未遂	30
麻薬	37
交通傷害	101
不法侵入	241 (住宅148, 店舗187)

い。暴行事件の中でも夫の妻に対する暴行（二六五件）や、レイプなど性的な暴行の事例（一〇八件）が多い。暴行事件の多くには飲酒がかかわっているとされている。さらに幼児や少年に対する性的ないたずら（三九件）が多発している。自殺や麻薬の問題もイヌイット社会で深刻な問題である。

イヌイット自身で解決できる紛争は自らで処理するが、現在の状況では官憲の手助けが必要な場合が多くなっている。罪を犯したものは、地元の警察に逮捕され、裁判所に送られた後、刑の重さによって異なる刑務所に送り込まれる。事件数から推測すると、ヌナヴィク社会では犯罪や事件が日常的に多発しているように見えるが、大半の事件は人口規模が八〇〇人以上の五つの村に集中しており、ほかの一〇村では事件はたまにしか起こっていない。

イヌイットの村の事件簿

ここではこの五年のうちにヌナヴィク地域の人口四〇〇人あまりの村で発生したおもな事件とその処理を紹介する。人口が少ないため、大きな事件は村人全体へ社会的な影響を及ぼす。村には白人とイヌイットの警察官が一人ずつ駐在しており、村の中で起こったほとんどすべての事件はこの二人によって処理されている。

悪霊払い事件

村の中の既婚男性と不倫の末、失恋し、精神的におかしくなった女性（二九歳）が奇怪な行動をとりはじめ「自分はクモダ」と母親に語ったために、驚いた母親は村の教会関係者（すべてイヌイット）に相談した。精神異常になったイヌイットは、多くの場合、自分を動物であると語りはじめ、傾向があるが、教会関係者はその女性のように見えた後、精神異常ではなく、悪霊がその女性にとりついていると判断した。そして、彼らは彼女を社会福祉事務所に監禁し、手足を縄でしばり、悪霊ばらいの儀式を数日にわたって行った。

当時、村にいた白人はこの事件のことについてまったく知らなかった。ただ、学校の教師が村の子供たちの挙動がいつもとは違うと感じる程度であったと言った。その女性は、軟禁されている場所から逃げようとした際に、窓ガラスにぶつかり腕にけがをした。出血が止まらなかつたために、彼女は教会関係者によって



1999年11月 ヌナヴィクのアクリヴィク村の様子

看護所に担ぎ込まれた。このため事件が明るみに出た。看護所の白人の看護婦が隣村(この地方の行政上の中心地)の救急センターに電話をかけ、その女性を村から連れ出すとともに警察に保護を求めた。

問題となった女性は隣村の病院で精神異常と診断され、さらにモントリオールの病院に送られ、四か月ほど治療を受けた後に村に帰ってきた。警察関係者は彼女に彼女を監禁した教会関係者を訴えるように助言したが、彼女は告訴せず、関係者は罰せられなかった。警察は教会関係者が罪を犯したと考えているが、教会関係者や村人はこの事件を悪魔の仕業であり、彼女が警察によって村の外に連れ出されなかったならば、今ごろ彼女はもとに戻っていただろうと考えている。

村の内外では、教会関係者がキリスト教的ではなく、シャーマン的な儀礼が行われたとして、うわさになったが、この事件が引き起こした社会的な動揺は時間とともに和らぎ、半年ぐら以後には、村はもとの状態に戻っている。



殺人事件

村の青年が、片思いの人妻に言い寄り、性交を強要した。しかし、相手に拒絶され、思いを果たせなかったために、その女性をライフルで殺害するという事件が起きた。この事件の取り調べ中に、彼は昨年病気で寝込んでいた母親、さらには子供の時に幼い妹を絞殺したことを自白し、村人に大きな衝撃を与えた。伝統的な社会であったなら、殺された女性の夫ないしは親族が加害者に復讐するか、コミュニティ全体で危険人物と抹殺していたことであろうが、現在ではそのような制裁は見られない。

この事件は刑事事件として警察によって処理され、犯人は判決を受けて、現在、カナダ南部の刑務所に服役中である。村人はこの悲劇の後、このようなことが二度と起こらないようにとひたすら教会で祈り続けた。

数か月には、事件は無かったかのように村は沈静化した。

不倫傷害事件

ある青年が人妻に酒を飲ませ、その女性が泥酔し、寝ている間に性的な暴行を加えるという事件が起こった。女性の夫はそのことを知り、怒り、青年に直接、復讐をくわえようとした。しかし逆に、青年によってナイフで腹を引き裂かれ大怪我を負うという事件が起きた。その男性は隣村の救急隊がチャーターした飛行機によってモントリオール

の病院に運ばれ、幸い、一命を取り止めた。

伝統的な社会であったならば、女性の夫の同意なしに性的関係を持った男性が社会的な非難を受けたであろうが、現行の法制度では判定は異なっていた。この事件では、青年の方は正当防衛が認められ、相手に怪我を負わせたが罪に問われることはなかった。数か月後、怪我を負った男性はモントリオールから村に帰ってきたが、彼に怪我を負わせた青年が無罪であったこと、そして、彼自身がその青年を襲ったことによって刑事上の加害者と見なされていると知り、憤慨していた。村人はそのような事件を起こした両方の男性を社会的に非難したが、村八分にすることはなかった。現在、その二人は同じ村に住んでおり、顔を合わすこともあるが、無視し合っており、それ以降特に、二人の間に争いは起きていない。

飲酒の問題

イヌイットには酒を醸造することや飲むことは、欧米人と接触するまではなかった。現在でも、多くの村は、条例によってイヌイットが酒を販売したり、飲むことを禁止したり、制限している。しかし、郵送や人づてに酒は村に入ってきており、酒を飲んでけんかをしたり、他者に暴力をふるうことが起こっている。この村では、数年前に若い女性（一九歳）が飲酒による急性アルコール中毒によって死亡

するという事件があった。

麻薬の売買

極北の村では、若者がマリファナなどの麻薬を常用することが問題となっている。彼らは、自室で隠れて麻薬を吸っており、他者に危害を加えることはあまりないので、村人は背後で非難はするが、それ以上の行動はとっていない。村の警官も問題を起こすまでは麻薬常用者を逮捕することはない。ただし、彼らは稼いだ金を麻薬につき込んでおり、妻子やそのほかの家族に経済的に悪い影響を及ぼしている。

村役場で働いていた白人の役人が、村人に麻薬を売りさばいていたとして免職になる事件があった。その白人は事実無根であるとして、法廷に訴えたが、村を去らざるを得なかった。彼が村を去ったことで、一応、問題は決着をみた。しかし、村人の間から麻薬の問題が解消されたわけではない。

自殺および自殺未遂

村では、今年にはいつてから二人の若者が自殺をした。自殺のきっかけは失恋、離別、人生がつまらなく感じるといったことであると言う。一人は一九歳の若者で、祖父をよく助ける孝行なハンターとして村人の間で評判になるほ

どの人物であった。ある夜、彼はガールフレンドと口論をした後、酒のみ、首吊り自殺をした。その数か月後、彼の無二の親友が後を追うように自殺した。二人の自殺の理由はよくわかっていないが、イヌイットの若者の間では何か小さなことをきつかけとした衝動的な自殺が多発している。

自殺者や自殺未遂者の親や兄弟は、深刻なショックを受けている。村人も若者の自殺について何らかの対処をしなければならぬとは考えているが具体的な対策はこうじられていない。多くの場合、関係者やそのほかの村人はキリストを析ることによって、精神的な問題を解決しようとしている。現在のイヌイットの村では、キリスト教信仰は彼らの苦しみの解決の手段としての機能を果たしている。

事件が物語るイヌイット社会

かつてのイヌイット社会には人々を取り締まる権力機構が存在していなかった。

一九四〇年代からカナダ政府は極北地域における警察力を強化し、カナダの刑法を適用するようになった。カナダの主流社会が「犯罪」であると規定する事件のみが、警察の活動の対象となった。そのため、一夫多妻、配偶者交換、飢饉時の嬰兒のまびきなどは、犯罪とされ、禁止された。

一方で、これまでは親族による復讐などでしか解決の方法がなかった殺人事件など深刻な事件を警察が処理してくれ

るようになった。

ここで紹介した事件やその処理は、現代という社会的脈絡の中で発生したものであり、定住化する以前の社会にはあまりなかったものである。そして、事件が発生した後には、イヌイットはその解決を警察に託し、精神的な問題解決(精神的な救い)をキリスト教信仰に求めている。しかし、信仰だけでは、現在発生している事件を防止することはできない。イヌイットの犯罪の発生は、多くの場合、カナダという国民国家の中におかれている彼らの従属的な政治・経済状況や無力感を反映していると考えられる。彼らの犯罪や紛争の防止は、具体的な防犯策や警察力の強化ではなく、イヌイット社会全体の政治・経済力の自律化を図ることによってはじめて可能になるのではなからうか。

岸上伸啓(きしがみ のぶひろ)

一九五八年高知市に生まれる。

国立民族学博物館(先端民族学研究所) 助教授。

専攻は文化人類学(社会変化研究、先住民資源論)。

調査地は、一九八四年よりカナダの極北地域においてイヌイット社会の調査を行ってきた。さらに一九九四年よりロシアのカムチャツカ半島のコリヤークやエベンの村、カナダの都市に住むイヌイットの調査を開始した。

著書は『極北の民 カナダ・イヌイット』(一九九八年、弘文堂)など。